

教職支援センター ニュースレター

巻頭言 【WBCが終わり、教育実習の季節がやってきた】

木々の緑が深まりはじめ生命の鼓動を感じる頃になると、教職を履修している4年生には「授業、大丈夫だろうか」という鼓動が高まる教育実習の季節がやってくる。そんな不安を鎮める方法の一つしかない。それは、「教材研究」をしっかりとやって、「生徒を信じる」こと。と書いた瞬間、「ちょっと待てよ、これって最近脚光を浴びた言葉だな」と気付かされた。テレビ視聴率42.4%と日本中を沸かせたWBC決勝戦、侍JAPANを率いて優勝に導いた栗山監督が試合前に、「試合に向けての気持ち」を漢字一文字で表すとしたらというメディアのリクエストに「信」と書き、とにかく「選手を信じる」だけだと語っていたことだった。続けざまに「そうか、一人一人個性の塊である生徒が在籍する侍JAPANという学級を、WBC優勝という学級目標を掲げて学級担任(監督)である栗山先生が一人一人の生徒(選手)の特性を把握して、先生と生徒の強固な信頼関係の中で、その特性を引き出す学級指導していたと同じことじゃないか。」「各コーチは、教科担任(専門分野)の先生で、教師集団が同僚性を生かして生徒に関わる情報を共有して、最大の力を発揮できるように環境を整えていたんだ。」と気付かされた。

というわけで、授業論の視点でみていくと、栗山監督の言動の一つ一つは授業実践そのものと感じだした。

「選手を信じる」は、「彼はやれるはずだ」と無意識のうちに期待をかけるピグマリオン効果といえるだろう。采配の一つ一つは、「WBC優勝」という単元のねらいに則して具現化されていく単元計画と授業展開と位置づけられるだろう。そこでは、試合ごとに対戦相手に合わせた「(授業の)ねらい」を設定し、そのねらい(試合に勝つ)を達成するためにはどうしたら良いかという「学習課題」を設定し、選手一人一人の動き(多重知性という視点の活用)をコーチ等から収集した情報を基に「予想」し、意欲を高めたり行動を考えさせたりするための「発問」はどのようにすればよいかと、まさに学習指導案(学級経営案かもしれない)を作成し、それを刻々と変化する状況を判断し臨機応変に変更(教師の意思決定:OODAループ)しながら、選手個々が主体的にかつ協働で試合に臨むという学習活動(栗山流「やるか、やらないか」)を展開させていたと読み解くことができるだろう。

ここまで考えてきて、改めて重要なことに気が付いた。栗山監督は教員を目指して教育学(教職)を学んでいたではないか。彼は教員にはならなかったけれど、教職で学んだ知見を野球という世界でフルに活用したではないか。

信州大学でより多くの学生が教職を学んで、人生のどこかで、教職の学びをフル活用して人生を豊かにしてくれたらと改めて思う季節になった。



小山 茂喜(教職支援センター 教授)

初級CST養成講座を振り返って(後半)

令和4年12月17日(土)松本キャンパスにおいて、令和4年度初級CST認定修了審査会が開催されました。CST(Cor Science Teacher)とは、学校現場で理科教育の中核的役割を果たす教員のことで、信州大学では長野県教育委員会と共同でCSTの人材養成に取り組んでいます。4年間CST養成講座に参加し、修了審査に挑戦した皆さんのコメントを紹介します。【第28号に引き続き、今回は後半をご紹介します!】

「理科教育の伝道師」を目指して…増田吉起さん(理学部)

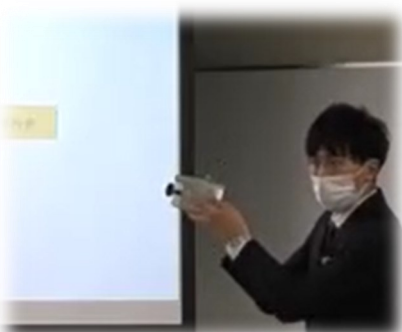


私は、大学入学当時から教員志望であり、またCSTの活動内容に興味があったため、CSTの活動には学部1年生から参加していた。定期的にキャンパスで開かれるCSTの講義では、多くの理科教材に触れることができ、そのおかげで「これは教材になるんじゃないかな」という物の見方をするようになった。CSTの活動に継続的に参加していくうちに、理科を楽しむ気持ちが高校までよりもさらに大きくなっていくのを実感した。

CST初級の認定を得るべく、CST初級修了審査会にも参加した。審査会では、中学理科の単元「レンズの働き」の教材について発表した。凸レンズに平行光(太陽光)を、光軸に平行になるように入射させると、光は焦点を通るように進む。今回発表した教材は、凸レンズの光源とは反対側に薄いコロイド溶液を置くことで凸レンズを通った後の光の道筋が視認できる、という教材である。この教材によって、「焦点の存在」や「実像が上下左右反対になる理由」を空間的に理解できると思われる。

この教材を発想したきっかけは、学部4年生になってから始めた家庭教師のバイトである。中学1年生の生徒に中学理科の光・レンズの働きを教える際、ちょっとした実験をいくつかやりながら教えようとし、その中で今回の教材を製作した。アイデアが浮かんでから実際に作ってみると、いくつか課題も見つかった。光源として懐中電灯を使用すると光量が足りないのでも太陽光を使うことにしたり、使用するレンズの焦点距離に合わせてコロイド溶液を入れる容器を選んだりした。実際に教材を作る過程で、CSTの活動に参加している仲間からも意見をもらうことがあり、自分にとって学びになることがとても多かった。

審査会で発表した教材には、「光やレンズの働きへの理解」だけでなく「科学現象がもつ美しさを知る」という役割もあると考えている。私が今回の教材を完成させてコロイド溶液中の光の道筋をはじめて見たとき、その現象の美しさを実感し、感動した。理科教師として現場に立った際、どのように理科を生徒に教えるべきか、を考えるだけでなく、どのように理科の面白さ、不思議さ、美しさを生徒に伝えるかということも考えていきたい。私は、これこそ理科の伝道師の役目だと思っている。



CST修了審査会を終えて…山田海智さん（理学部）



近年「理科離れ」が叫ばれているが、受験競争の激化に伴い、理系ですら入試突破のための理科を学び、自然科学の魅力、事象への好奇、日常への応用が軽視されている状況が依然としてあると感じる。中学、高校理科において、そのような理科本来の魅力を伝える授業が大切であり、教員自身も知識と好奇心を併せ持つ必要があると感じる。

今回の修了審査会では、多くの学生がそれぞれ工夫しながら授業展開をしていた。簡便で分かり易い実験の仕方であったり、新たな実験教材研究など、とても興味深い内容であった。

私は静電気が日常生活に大きく関わっていることを、実験を交えて理解することをテーマに行った。誘電分極の実験は簡便で分かり易く、興味を引く内容に出来たと評価している。一方で、正負どちらに帯電しているかが分からず、「教科書に書いてある」で進めてしまうのは好ましくなかったと感じる。正負どちらに帯電しているか、簡単に調べられる教材を今後制作してみようと思う。

審査会を終えて…山本陽太さん（農学部）

コロナの影響を受けながらでしたが、担当の先生方には配慮をしていただき、無事に修了審査会を迎えることができました。模擬授業では、審査会に参加いただいた先生から「どうしてこの実験をやることにしたのか」と聞かれる場面があり、教材の選び方について考えさせられました。「教科書に載っている実験だから」というだけではなく、意図と目的をしっかりとって実験をする必要性を感じました。他の先生方の授業の工夫などを観れたことも含めて、有意義な機会になりました。ありがとうございました。



教職支援センター3～4月の動き

- 教職教育部会(3/1)
- CST養成プログラム実施委員会(3/8)
- 教職支援センター拡大打合せ会議(3/6)
- 長野県総合教育センターとの連絡協議会(3/6～3/20)
- 教職教育委員会学芸員養成課程実施分科会(3/15)
- 新入生教職ガイダンス(4/5)
- 高年次生教職ガイダンス(4/3～4/7)



4月5日新入生教職ガイダンスの様子です。
今年もたくさんの新1年生が集まりました。



地域連携パートナーからのメッセージ

小川村公設学習塾「おがわ未来塾」開設一年目をふりかえって

小川村教育委員会教育長 北田 愛治

公設学習塾開設については、以前から検討してきましたが、ニーズや私塾への配慮、予算等の問題もあり、実施までは考えていませんでした。そんな折、行政懇談会において村民より学習塾の開設の要望があり、村長より開設に向けて検討依頼が教育委員会にありました。これを受け、県内外の市町村の取り組み状況を参考にしたり、保護者アンケートを実施したりと検討を深め、令和4年度開設に向け、実施計画を策定し、小川村公設学習塾「おがわ未来塾」を下記の2つの形式で行うこととしました。

○中学校に、数学と英語の村費講師2名による「放課後おがわ未来塾」を週3回開設。

(小学校の村費理科講師を週1回派遣し理科も開設)

○小学生には、月2～3回程、土曜日の2時間「土曜おがわ未来塾」を開設。

(算数中心・当初4年～6年生対象→希望があり、中学生も参加可能に)講師は、信州大学教職支援センターの荒井先生のお力を得て大学生を派遣していただきました。

講師の選任にあっては、教育学部の宮崎先生、茅野先生に相談したところ、副学長の平野先生に連絡を取っていただきました。そして、平野先生から、産学官地域連携課の西澤さんを紹介していただき、具体的に教職支援センター荒井先生につないでいただきました。そして、工学部の学生5名を派遣していただくことができました。この間の信州大学の皆様の手厚いご支援には本当に感謝の言葉しかありません。こうした経緯で開設した公設学習塾「おがわ未来塾」は、村内外の保護者、教育関係者等多くの方から賛辞や羨望の言葉をいただくことができ、矜持を得た思いでした。「土曜おがわ未来塾」は、当初3名の塾生、その後8名となり運営してきました。

塾生からは「優しく教えてもらい良く分かった」「質問したいと思ったら声をかけてもらい良かった」「数学の点数が伸びた」等という感想が聞かれ、開設して良かったと思いました。また、講師の大学生からは「この塾に通うことそれだけでもすごい価値がある」「もっと積極的に質問を」「漢字練習はもったいない」「もっと声掛けをすればよかった」等、塾生にとっては課題も指摘され、視野も広がったのではと思った次第です。保護者からは、多くの感謝の言葉の他に、何度か同じ質問をすると、教える言葉がきつくなっていき通塾をしぶるという指摘もあり、講師の大学生にとっても子ども理解を深め、教えるということを学ぶ良い機会であったとも思いました。何もかもが初めてのことで、反省と成果全てが得難い果実となりました。

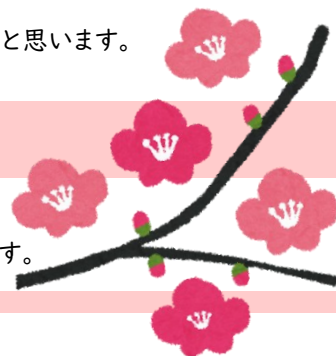
令和5年度は、ガイダンスを充実させ、塾生自らの課題や希望を伸ばす、自らが求めて学びを深める塾のあり方を模索しつつ、児童・生徒の力をさらに伸ばしていきたいと考えています。また、大学生の皆さんには塾生と共に学びを深めていただけたらと思っています。さらに、隣の長野市中条地区の児童・生徒にも参加の希望を募り、活気に満ちた「おがわ未来塾」をめざしたいと考えています。

今後も、信州大学、教職支援センターの先生方、大学生の皆さんのお力添えを切にお願いしたいと思います。

人事異動について

河野桃子准教授が、令和5年度をもって日本大学文理学部に異動されました。

令和5年度も前期の間は、非常勤講師として「教職論」「道德教育の理論と実践」をご担当されます。



編集後記

新学期を迎え、賑やかなキャンパスの風景が戻ってきました。今年度も、新入生対象の教職ガイダンスにはたくさんの学生が集まりました。高年次も教職課程でさまざまな活動を行っています。新型コロナウイルスも落ち着きをみせるなか、今後も、学生・卒業生の活躍を紹介していきたいと思っています。

(広報担当 横嶋敬行)

